

人生詩集（8）

多谷昇太

「恍惚公園」

三寒四温の早春の候、

その陽気に誘われるように町の公園に来て、

ベンチに腰掛けて、一人の男が

日向ぼっこをしている。している。

初老のその男の顔はいたって無表情、

仕事はしているのやら、いないのやら。

近在の者なのか、風に吹かれて来た者なのか、

とんとわかりませぬ。

ほめられもせず、苦にもされぬ、

賢治の、負けぬ人、であるのなら、

それはそれで結構、知らぬこと。

しかしそんな殊勝な御仁にはとんと見えませぬ。

時おりタバコをポカリと吹かしては、

青い空を見上げているばかり。

そしてその空にはぼっかりと浮かぶ、

白い雲がひとつあるばかり：

西洋に遅れること、ん、十年、

日本も立派な老国になりました。

人もすっかり老い果てて、

恍惚の人になるのなら、

それもそれで目出度く、結構、知らぬこと。

それならこの男も立派な日本人の一員だ。

しかしそんな、認知、され、公認、された、幸福

老人とも見えませぬ。ではいったいどうして、

この男、こんなに恍惚の人…？

吹く春風が云うことにはこの男、

世の中を万事受け身で生きて来て、

対応するが精一杯。

妻もなければ子もありませぬ。

あげくガンの告知など受けまして、

余命数ヶ月の身の上だとか。

ハハア、なるほどそれで…。

それなら公園ポカンも、さもありなん。

空にはぼっかり白い雲、動かずひとつあるばかり。

男に負けぬ、まるで恍惚の雲のよう…

「このまま死ぬのかな？」

男がつぶやきました。

「このまま…生きた証も…なにも…なく？」

突然顔をゆがめて下にうつむきます。

はじめて見せる男の生きた顔、その表情。

ポカンドころか、心には懊悩の嵐が吹いている？

人差し指と中指に挟んだタバコを小刻みにふる

わせて：くやしいのか、悲しいのか、まるで地面

に沈んで行くように、深く上体を曲げて行きます。

そのまま自分の影とにらめっこ。

空にはぼっかり白い雲、

男のことなど知らぬ、恍惚の雲であるばかり：

やがて、

影法師から最後通牒でも受けたのかしらん、

男は深く、且つ鷹揚に、影法師にひとつうなずき

ました。そして「そうだ」とひとり言ちます。

やがて上体を上げて、タバコを消しますと、

始めてまわりに気づいたかのように、

辺りをぐるりと見わたしました。

近くで砂遊びをしていた、親子連れが目にとまり

ます。顔にぎこちない笑顔を浮かべながら立ち上

がり、立ち上がり、近づいて行って、

「やあ、ぼく、こんにちは」と男の子に挨拶をし、

「奥さん、こんにちは。いいお日柄で」と、

その子の母親にも挨拶をします。

挨拶を返すのでした。

呆気にとられる母子に会釈して、男は歩き出し、

男は嬉しそうに顔をほころばせて、

歩き出し、恍惚、公園から、

男の子の頭を撫でようとしています。

出て行こうとするのでした。

しかしお母さんが飛んで来て、男を睨みつけると、

じゃけんに男の子を引っ張って行きました。

(——始めて受け身でなく、自分から——)

そのお母さんの背に一礼しますと、

男はポケットからタバコを取り出して、

男は、「もう、もう、決して……」とつぶやき、

それをまるごと、

「必ず、必ず、これから……」とも云うのでした。

公園のゴミかごに放り捨てて行きます。

すると男の子が追いかけて来て、男に、

空にはぼっかり白い雲、やっぱり恍惚の、雲?…:

「おじさん、こんにちは」と

あれれ、なんだかその雲の形が変わって行きます。  
風が吹いてきたようで、雲を帆船の姿に変えて行くのでした。どうもその風は地上から、この男から巻き上がったようでもあります。

人は風…

春風に吹かれて来た男はもういない。

こんどはみずから世に風を吹かせようと、

男は今、最後の人生航路に出航して行きます。

同期した帆船も男とともに勇躍出航して行くよ

うです。「もう決して…」男の一言が、

清しく公園を清めたようでした。恍惚公園を。



人は風…地に生（あ）れて…吹け

「めくるめく町」

あら建った、また建った。

空にニヨキニヨキ、高層マンションまた建った。

ここはどこ？私はだーれ？

めくるめくようなこの町で、

私はいったい誰だったでしょう？

あら大きい、あら立派、

この駅あの駅すぐ変わる。

ここはどこ？私はだーれ？

人生何駅出発して、

終いの駅はどこだったでしょう？

みんな不思議じゃないのかしら。

あたりまえ顔してあの町この町お買い物。

こんな贅沢、豊かさを、

魔法の仕業だと思わないなんて、

きつと私たち、狐と狸に化かされている。

ほら思い出してごらん。

大きな軍艦、たくさん戦闘機あったでしょ。

軍靴鳴らして、兵隊さんたちが行進してたでしょ。

神国日本、大東亜の盟主だなんて、

いつから私たち、そんなに偉くなったっけ？

気が付きや一面焼け野原、すってんてんの丸裸。

みんな阿修羅にだまされた！

こんど気が付くその時にや、私たち、

いったいどうなっているのでしょうか。

あら揺れた、また揺れた。

地面ユサユサまた揺れた。

ここはどこ？私はだーれ？

狐狸変化のこの町をたちまち壊してしまうよう。

気が付きや昔と同じ、あたり一面焼け野原。

みんな狐と狸に化かされた！

そんな焼け野のあちこちで、

駅を見入出す人がいる。

遠くあなたを呼んでる人がいる。

「ほら、あそこ」と指差して、きつと歩み出す。

私たちも、必ずついてまいりますよう。

人生あの駅現れる。

焼けずに私たちを待っていた。

青い電車が来るならば、

乗りそびれずに、今度は必ず乗りましょう。

大事な人はそこにいる。

母さん呼んでるあの町へ、今度は必ず、

必ず、帰ってまいります。



みゆき嬢（イメージ拝借）



「ホームにて」 photo AC より借用